

熱，天の力，自然発生

——アルベルトゥス・マグヌス『気象論』第四卷における
物質的実体の生成について——

アダム・タカハシ

1. 序 論

本稿は、アリストテレスの『気象論』第四卷に対して、十三世紀西欧の神学者アルベルトゥス・マグヌス（1200頃～1280）が書いた註解書の解説を目的とする¹⁾。特に、自然の事物の生成について、アルベルトゥスがアリストテレスの議論を踏まえながら、どのような理論を展開したのかを検討することにしたい。現在、アリストテレスの『気象論』は、彼の著作集の中で広く関心を持たれている作品とは必ずしも言えない²⁾。だが、中世から初期近代にかけての状況は、現在と大きく異なっていた。『気象論』は、『自然学』等で展開された抽象度が高い自然哲学の理論を前提とした上で、この世界の具体的事象に関する一般的理論を与える作品として、アリストテレスの著作集の中でも枢要な位置を占めていた³⁾。

1) アルベルトゥスの『気象論』(*Meteora*)のテキストとしては、*Meteora*, ed. Paulus Hossfeld (Ed. Cologne, 6/1) (Münster, 2003)を用い、引用の際には適宜該当箇所を記す。邦訳は著者(タカハシ)による。この作品については未だ包括的な研究はなされていないが、さしあたり下記の文献を参照せよ。P. Hossfeld, "Der Gebrauch der aristotelischen Übersetzung in den *Meteora* des Albertus Magnus," *Mediaeval Studies*, 42 (1980), 395-406. また、アルベルトゥスの自然哲学一般に関しては、下記の文献を参照せよ。James A. Weisheipl (ed.), *Albertus Magnus and the Sciences: Commemorative Essays 1980* (Toronto, 1980); Irven M. Resnick (ed.), *A Companion to Albert the Great: Theology, Philosophy and the Sciences* (Leiden, 2013).

2) アリストテレスの『気象論』に関しては、下記の邦訳を用いた上で、通例に倣い Bekker 版アリストテレス全集の該当箇所を記した。『気象論・宇宙論』(『アリストテレス全集』第5巻), 泉治典・村治能就訳, 岩波書店, 1969年。

3) アリストテレス『気象論』(特に第四卷)の西欧中世・初期近代における受容史については、まず Martin の論考を参照せよ。C. Martin, *Interpretation and Unity: The*

その『気象論』の中でも、特に第四卷はアリストテレス主義の自然哲学、特に物質理論の歴史的展開を考察する際に一際重要な意味を持っている⁴⁾。というのも、この第四卷でアリストテレスは極めて〈物質主義〉的な哲学を提示したからである。一般に彼の哲学を特徴付けられる論理的・形而上学的な諸理論は背後に退き、代わりに自然現象が四つの「性質」(温・冷・乾・湿)の機械的な作用・被作用によって説明される。したがって、この『気象論』第四卷の註解を分析することで、私たちは、アリストテレスの〈物質主義〉的理論がどのようにスコラ学者によって受容されたのかを把握し、さらに(「実体的形相」や「第一質料」といった抽象的な概念を中心に整理されがちな)スコラ自然哲学の実像についても、より適切な理解を持つことが可能となるのである。

アルベルトゥスは、当時入手可能だったアリストテレスのほとんどすべての著作に対して註解書を残した。『気象論』も、その点で例外ではなかった。そして、この『気象論』第四卷を註解するにあたり、自然の事象を「性質」の機械的な作用・被作用で説明するアリストテレスの〈物質主義〉的な立場を彼は批判的に受容することになった⁵⁾。

冒頭で述べたように、本稿では特に自然の事物の生成に関するアルベルトゥスの議論を検証するが、続く本論では二つの論点に注目しながら議論を進めたい。まず第2節で論じるのは、自然現象の生起における「温=熱」の働きである。アリストテレスの『気象論』第四卷において、「温=熱」は通常のエッセンスの一要素としての役割を超えて、それ自体が一

Renaissance Commentary Tradition on Aristotle's Meteorologica IV (PhD thesis, Harvard University, 2002); *Renaissance Meteorology: Pomponazzi to Descartes* (Baltimore, 2011). また、アリストテレスの哲学全体における『気象論』第四卷の重要性について、私は Freudenthal の著作にその多くを負っている。G. Freudenthal, *Aristotle's Theory of Material Substance: Heat and Pneuma, Form and Soul* (Oxford, 1995).

4) 『気象論』第四卷の特殊な性格については、前掲の Martin の博士論文、及び I. Düring, *Aristotle's Chemical Treatise Meteorologica, Book IV with Introduction and Commentary* (Göteborg, 1944) を参照せよ。

5) アリストテレス主義の伝統における〈物質主義〉的(あるいは〈自然主義〉的)な立場、およびそれと〈形而上学〉的な立場との対立という視点については、Kessler の下記の論考に大きく依拠している。Eckhard Kessler, "Metaphysics or Empirical Science?: The Two Faces of Aristotelian Natural Philosophy in the Sixteenth Century," in *Renaissance Readings of the Corpus Aristotelicum: Proceedings of the Conference held in Copenhagen 23-25 April 1998*, ed. M. Pade (Copenhagen, 2001), 79-101.

つの能動的な力として考えられ、自然現象を生起させる決定的な役割を担うことになった。私が注目するのは、そのようなアリストテレスの考えを受けて、アルベルトゥスが自然の事物の生起を論じる際に、いかなる働きを「温＝熱」に認めたのかという問題である。次に第3節で検証する主題は「自然発生」の問題である。「自然発生」とは、雌雄の通常の生殖プロセスを経ないで、腐敗した事物の中から蛆虫などが発生する現象のことだ。この「自然発生」の議論は、生殖を経ないで生成する自然の事物（例えば、鉱物）の生成を説明する際のベンチマークとなる役割を果たしていた。したがって、「自然発生」の議論をたどることで、自然の事物の生成にかんするアルベルトゥスの一般的な理論が、アリストテレスの議論の註解の中でどのように生じたのかを理解することが可能となる。その分析の過程で、アリストテレスの特権的な「註解者」(Commentator)であったアヴェロエス(1126頃～1198)の議論も前提として重要であったことも、合わせて示されることになるだろう。

2. 自然の事物の生成と「熱」の作用

2.1. 『気象論』第四巻における「熱」の議論と、アルベルトゥスの解釈

まず、アリストテレスが『気象論』第四巻で「温＝熱」に対して、どのような働きを認めたかを簡単に整理することから始めよう。よく知られているように、アリストテレスは、この世界が四つの「元素」(火・空気・水・土)と、その組み合わせから成立しており、そして個々の元素は四つの性質(温・冷・湿・乾)(と、四元素に共通の基体をなす第一質料)から構成されていると考えていた。これら四つの原初的な性質は、本来は四つの元素の構成要素としてのみ存在するのであり、個々単独では存在しえない。したがって、そのような性質の一つであるはずの「温」も、アリストテレスの自然哲学の原則では、単独では存在することはできないものだ。だが、『気象論』第四巻においては、それらが単独で作用する、あるいは作用を被る原理として論じられることになる。この巻でアリストテレスは、四つの「性質」(温・冷・乾・湿)の作用・被作用のみによって、自然現象の生起を説明する極めてラディカルな〈物質主義〉的な立場を示した。また、関連して、彼が四つの「性質」を二種類に分けたことも前提として理解されなければならない。一

つは「能動的」な性質であり、それは「温」「冷」である。もう一つは「受動的」な性質であり、すなわち「湿」「乾」である（『気象論』IV. 1, 378b10-13）。この著作における彼の考えによれば、自然現象全般は「能動的」な性質が「受動的」な性質に作用することで生起するのである。

『気象論』第四巻の註解において、アルベルトゥスはこれら四つの「性質」と、それらの作用・被作用の説明については、アリストテレスの議論を基本的に踏襲する。彼が「私たちは、能動的な〔原理〕が複合的な事物の中で行い、そして受動的な性質の特定の形相において生じる、これら性質のすべての働きを考慮しなければならない」と述べる時、彼も自然現象を「能動的」な性質（「温」と「冷」）の「受動的」な性質（「湿」と「乾」）への作用として捉えていることは明らかである⁶⁾。

だが、アルベルトゥスは、単にアリストテレスの言説を繰り返すだけではない。特に注意されるべきなのは、彼が四つの「性質」の作用・被作用の基本的な説明についてアリストテレスの議論を踏襲するものの、より多くの紙幅を能動的な「温」の役割の記述に費やすことである。ただし、背景としてあるのは、ここでもアリストテレスの議論だ。アリストテレスによれば、「冷」の働きは「熱が不在である限り」（『気象論』IV. 8, 384b27-28）で認められるという。すなわち、能動的な性質として「温」と「冷」の二つが挙げられていたが、「冷」は単なる「温」の欠如態でしかないので、この物質世界を構成する能動的な原理は、実質的に「温＝熱」だけに限定されるのである。このようなアリストテレスの基本的な議論の構図を土台にして、さらにアルベルトゥスは「形相的原理は、質料的な〔原理〕よりもより能動的である」（*Formale autem plus est activum quam materiale*）という原則を加えることで、自然現象における「温＝熱」の役割を強調しようとする⁷⁾。彼によれば、すべての自然の事物を形作る能動的、かつ形成的原理は熱であるというのだ⁸⁾。

6) Albertus, *Meteora*, IV, t.1, c.1, 211, lns. 39-41: “debemus assumere omnes operationes istarum qualitatum, quas efficiunt activa in corpore mixto et quae fiunt in speciebus qualitatum passivarum.”

7) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 2, 212, lns. 24-25.

では、「温=熱」という性質がどのように作用する時に、秩序を欠いた質料から、固有の形相を備えた事物が形成されるのだろうか。アリストテレスによれば、自然の事物の生成は「熱と冷が質料を支配することによって」生じるといふ（『気象論』IV.1, 379a1）。彼は能動的な性質が受動的な性質との間に適切な均整を保つ場合にのみ、実体的なものは生起し、かつ存続しうると考えた（逆に言えば、両者の性質の間のあってしかるべき均整が失われれば、それらの物体は「腐敗」し始めることになる）。この点でも、アルベルトゥスが、能動的性質が「湿と乾からなる質料を調和的に支配する」（proportionaliter vincunt materiam humidi et sicci）時に事物の生成が行われると述べる時、熱と受動的性質との均衡が重要であることに彼も同意していることは明らかである⁹⁾。

このように『気象論』第四巻の註解の中で、アルベルトゥスは四つの「性質」の作用と被作用、および「温=熱」の特権的な働きについては、アリストテレスの説明を基本的に踏襲していると見て良いだろう。だが、果たしてアルベルトゥスは、単に「温=熱」という物質的な原理（の作用）のみで、この世界の事物の形成を説明するのに十分であると考えていたのだろうか。確かに、『気象論』第四巻のアリストテレスの議論は、そのように読むことができる。しかし、その点でアルベルトゥスは、アリストテレスを超えて議論を展開することになる。次節では、自然の事物の生成において「熱」に加えていかなる原理が必要であるとアルベルトゥスが考えていたのかを検証することにする。

2.2. 自然の事物の形成的原理：熱と天の力

アルベルトゥスは、自然の事象を四つの性質の作用・被作用によって説明するアリストテレスの議論を超えて、事物の形成的原理を論じることになる。その点を確認するために「何が〔元素の〕混合というものへ、その形相をもたらすのか」（quid producat formam illam in naturam mixti）というアリストテレス自身は提起しなかった問いをめぐる彼の

8) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 215, lns. 55-58: “sciendum quod absque dubio ad formam introducendam non operatur nisi calor in omnibus compositis, sive sint mineralia sive vegetabilia sive animalia.”

9) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 3, 214, lns. 33-34.

議論を分析することにしよう¹⁰⁾。

上記の問いに答えるために、アルベルトゥスは過去の主要なアリストテレス主義の哲学者たちの見解を取り上げる。彼によれば、これらのアラビアの哲学者たちの間には、自然の事物の形成の原理をめぐって見解の不一致があったという。まず取り上げられるのは、アヴィセンナ（とアル・ガザーリー）に帰される見解である。彼らは混合の実体的形相は「性質」には還元されないと考えたという¹¹⁾。というのも、彼らは自然界の諸事物の形相が「形相付与者」（*dator formarum*）と呼ばれる天界の原理（より正確には、能動知性）に由来すると考えていたからだ¹²⁾。だが、アルベルトゥスは、形相が離存的に存在すると考える立場に批判的だったため、この「形相付与者」の理論も一貫して退けることになった¹³⁾。

次に、アルベルトゥスは「逍遥学派」（*Peripatetici*）の議論に言及する。彼によると、この「逍遥学派」の者たちは「自然熱」（*calor naturalis*）が、月下の事物の形相を生み出すと考えていたという¹⁴⁾。これは、アリストテレスの議論を、そのまま展開したものであるように見えるかもしれないが、単に「アリストテレス」とされるのではなく、あくまで「逍遥学派」の説だと表現されている点に注意する必要がある。実際、ここでアルベルトゥスは、アヴェロエスの『「気象論」中注解』における解釈を踏襲していると考えられる¹⁵⁾。というのも、アヴェロエスは「熱」と自然の事物の形相因とを同一視し¹⁶⁾、「生成は自然熱によって生じる」（*generatio fit per calorem naturalem*）と明確に述べたからであ

10) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 214, lns. 76-77.

11) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 215, lns. 2-4: "Avicenna et Algazel concedebant formam substantialem non esse a qualitibus activis."

12) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 215, lns. 4-8.

13) Cf. D. N. Hasse, "Avicenna's 'Giver of Forms' in Latin Philosophy, Especially in the Works of Albertus Magnus," in *The Arabic, Hebrew and Latin Reception of Avicenna's Metaphysics*, eds. D. N. Hasse and A. Bertolacci (Berlin, 2012), 225-249.

14) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 215, lns. 12-35.

15) アヴェロエスの『「気象論」中注解』については、*Aristotelis opera cum Averrois commentariis* (Venice, 1562-1574; repr. Frankfurt, 1962) の第5巻所収のテキストを使用し、引用する際には *MCM* と省略した上で該当箇所を記す。邦訳は著者（タカハシ）による。

16) Averroes, *MCM*, f. 461L: "forma transmutans materiam ad recipiendum aliquam formam, et separare faciens primam, est de necessitate calor."

る¹⁷⁾。アルベルトゥスが「逍遙学派」の説として「自然熱」の働きを語る際、アヴェロエスの解釈を反復している蓋然性が高い。

「逍遙学派」の解釈に同意する形で、アルベルトゥスも「自然熱」が物的実体の形成にとって不可欠な原理であることは肯定する。だが、彼は「自然熱」という「性質」の作用によってだけでは実体を生み出すことはできないという。彼は「複合した物体の実体的形相は、それが鉱物、植物、動物いずれのものであれ、質的变化によっては導入されない」と主張する¹⁸⁾。しかし、「自然熱」だけではないとしたら、どのような能動的な原理によって自然の事物は固有の形相を備えた完成形態へと至るといえるのか。この論点を考察するにあたり、アルベルトゥスは「自然熱」には、星辰に由来する特殊な力がともなっている必要があると主張した。

というのも、植物や動物の種子の熱の中に、動物や植物の「形成[力]」と呼ばれる力があるように、その[自然熱]の中には天と星辰の動者の力、そして気質 (complexio) の、あるいは、それが形成するところの[実体の]本性の形相の力が存在する。そして、それは鉱物において、そしてそれらの熱においても同じようなものなのだ。そして、だから熱の働きは、[形相が]潜在的に存在する質料から形相を引き出すことであり、そして質料を規定する形相のもとで器官を成形し、器官と[その]部分の場所を秩序付けることである¹⁹⁾。

17) Averroes, *MCM*, f. 461M: "Tam igitur declaratum est ex hoc quod calor est duplex, naturalis et extraneus: et quod generatio fit per calorem naturalem, corruptio autem per extraneum."

18) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 214, lns. 54-55: "per alterationem autem non inducatur forma substantialis mixti, sive sit mineralis sive plantae sive animalis."

19) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 4, 215, lns. 20-28: "enim est in eo vis caeli et motorum caelestium et vis complexionis sive formae illius naturae, quam format, sicut in calore seminis plantae vel animalis est vis, quae vocatur formativa animalis vel plantae. Et eodem modo est in mineralibus et calore eorum. Et sic opus caloris est educere formam de materia, quae potentia est in ipsa, et figurare organa et ordinare situm membrorum et partium sub forma terminante materiam."

アルベルトゥスは、自然の「熱」に加えて「天と星辰の動者の力」(vis caeli et motorum caelestium)が必要であると主張する。さらに、そこには「形成力」と呼ばれる特殊な力、あるいはそれに類した力が関わっているという。既に論じたことがあるように、アルベルトゥスは「形成力」と呼ばれる力が、天の知性に由来すると考えていた²⁰⁾。結局「自然熱」はそのような天に由来する力とかわることで、自然の実体の形相を作る能力を得るのである。

3. 自然発生と生成の一般理論

ここまで見たように、アルベルトゥスは「性質」の作用・被作用という『気象論』第四卷本来の〈物質主義〉的な説明に加えて、天に由来する力の介在が自然の事物の生成には不可欠であると考えていた。そのような理論を展開するにあたり、彼にとって重要だったのは動物発生の議論である。というのも、彼は自然の事物の生成一般の問題を、動物発生の議論を援用、あるいは拡張することで論じたからだ。したがって、以下ではまず、『気象論』第四卷の註解で、アルベルトゥスが動物発生に触れている部分を簡単に分析する。その後、「自然発生」の議論に注目することで、彼がアリストテレスの理論的枠組みを踏まえながら、自然の事物の生成に関してどのような一般理論を展開したのかを見ることにしよう。

アリストテレスは『気象論』第四卷第二章で、「熱」の働きとしての「加熱」、より具体的には「熟することと、煮ることと、焼くこと」について論じている。その箇所を註解するにあたり、アルベルトゥスは人間の「種子(精液)」における「熱」の働きを論じる特別な節を設けている²¹⁾。つまり、彼は「種子」の中における熱の働きの問題を、人間の発生の過程そのものと考えているのである。アルベルトゥスによると、この人間の「種子」の中の熱は、天の力を内包することにより、形を欠いた質料に作用し、結果的に人間としての形を生み出すというのである。

20) 「形成力」の問題については、Adam Takahashi, "Nature, Formative Power and Intellect in the Natural Philosophy of Albert the Great," *Early Science and Medicine*, 13 (2008), 451-481.

21) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 13, 225-227.

このような生物の「種子」を巡る議論が重要なのは、アルベルトゥスにとって動物発生論が、(雌雄の生殖を経ないで生み出される)他の自然の諸事物の生成を語る際の理論的な範例として機能していたからである。

[加熱の幾つかの種類が] 人間において見られるように、それらはすべての動物、それらの部分、そして植物において、それらの部分において、さらにすべての鉱石や鉱物においても見られる。というのも、私たちはすでに述べたように、それら[鉱石と鉱物]はそれらの生成の原理を熱と湿にもっているからだ²²⁾。

人間の体内において見られることを基準として、自然の事物の生成も考えられていることがうかがえるだろう。人間の体内の「熱」の作用が、他の自然現象において「熱」が果たす役割を考察する際の特権的な参照項になっているのである。同じ〈生成=発生〉のメカニズムが、動植物だけではなく、鉱物の形成においても見出されるというのだ。

ただし、人間の発生は当然生殖を経て生じるものであるが、自然の事物においては、全ての事物がそのような過程を経て生じるわけではないことは明らかだ。それは鉱物など非生物の生成にとどまらない。動物においても、雌雄の生殖を経ないで生じる発生、すなわち「自然発生」が見られる。私たちにとって重要なのは、アリストテレス自身が『気象論』第四巻の中で、「自然発生」の現象に関して数カ所で言及を行っていることだ(379b6-8, 381b9-12, 389b5-6)。したがって、その註解者であるアルベルトゥスも、この問題に取り組む必要が生じたのである。

ただし、この「自然発生」の問題は、単に『気象論』第四巻で言及されているという事情を超えて、アリストテレス主義の伝統において極めて重要な意味を持っていた²³⁾。というのも、この現象によって、この古

22) Albertus, *Meteora*, IV, t. 1, c. 13, 226, lns. 87-88 - 227, lns. 1-4: "Sicut autem haec in homine inveniuntur, ita inveniuntur in omnibus animalibus et in partibus eorum et in plantis et in partibus earum et insuper in lapidibus et mineralibus omnibus. Omnia haec enim principium suae generationis, sicut supra diximus, habent in calido et humido, [...]"

23) アリストテレス主義の伝統における「自然発生」の問題については、M. Van der Lugt, *Le ver, le démon et la vierge: les théories médiévales de la génération extraordinaire*

代ギリシアの哲学者の自然哲学の基本的理論が覆される可能性が存在したからだ。アリストテレスはプラトンを批判し、物質から離れた「形相」は存在しないと考えた。代わりに、「形相」は質料を常に伴う必要があると考えたが、そのことを示すために彼が範例として取り上げるのが、生物が「種子」から生み出される現象だった。というのも、それによって生物の「形相」が、種子の中に潜在的（可能的）に存在していることが理解されるからである。その考えはアリストテレスによって「人間が人間を生む」と定式化されることになった²⁴⁾。しかし、先に説明したように、「自然発生」においては雌雄の生殖を欠いたまま動物が突如発生するのであり、生まれてくる生物とそれを生み出しているものとは全く種が異なるのである。そのために、例えば、古代のテミスティオス（317年頃～388年頃）は「自然発生」の現象が、アリストテレスの自然哲学の基礎を掘り崩すものだと見なし、「自然発生」が生じるにはプラトンが考えたように物質から離れた形相が自存しなければならないと考えたのである²⁵⁾。アリストテレスの理論を擁護しようとする者たちは、「自然発生」について師を超えて議論を展開する必要があった。アルベルトゥスも、そのようなアリストテレス主義者の一人に他ならなかった。

ただし、アルベルトゥスの議論を見る前に、私たちはアヴェロエスの議論を簡単に理解しておく必要がある。というのも、アヴェロエスは『形而上学』の註解において「自然発生」の問題を論じ、その議論が後世の哲学者・神学者にとってアリストテレスの自然哲学の枠内で「自然発生」を論じる際の最も重要な参照項の一つになったからである²⁶⁾。『形而上学』Λ巻において、アリストテレスが「人間は人間を生む」

(Paris, 2004), 131-187; D. N. Hasse, "Spontaneous Generation and the Ontology of Forms in Greek, Arabic, and Medieval Latin Sources," in *Classical Arabic Philosophy: Source and Reception*, ed. P. Adamson (London, 2007), 150-175.

24) Cf. D. M. Balm, "Human is Generated by Human," in *The Human Embryo: Aristotle and the Arabic and European Traditions*, ed. G. R. Dunstan (Exeter, 1990), 20-31.

25) D. Henry, "Themistius and Spontaneous Generation in Aristotle's *Metaphysics*," *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 24 (2003), 183-207.

26) 「自然発生」に関するアヴェロエスによる議論については、下記の文献を参照せよ。C. Genequand, *Ibn Rushd's Metaphysics: A Translation with Introduction of Ibn Rushd's Commentary on Aristotle's Metaphysics, Book Lām* (Leiden, 1986), 24-32; Hasse, "Spontaneous Generation and the Ontology of Forms," esp. 158-162.

(『形而上学』 XII. 3, 1070a28-29) と述べたところの註解で, アヴェロエスは次のように述べた²⁷⁾。

したがってアリストテレスは, 人間は人間と太陽とによって生まれると述べた。そして, この熱は, 他の星々の熱と混合した太陽の熱によって, 土と水の中で作られる。そして, だから, 太陽と他の星々とが, 自然に存在するいかなるものどもにとっても生命の原理なのである。したがって, 水と土へと別れた太陽と星々の熱は, 腐敗の中から生物を生み出すのである²⁸⁾。

アヴェロエスは動物発生が月下の元素やその性質だけではなく, 天に由来する熱も必要であると考えた。この見方によれば, 太陽やその熱が生殖を経ないで生物が生成する際の形成的原理として機能することになるだろう。

このアヴェロエスの考えを踏まえた上で, アルベルトゥスの「自然発生」に関する議論を見ることにしよう。参照するのは, アリストテレスが『気象論』第四卷第一章で次のように述べる箇所に対する註解である。

動物が腐敗物の中で発生するのは, その中に自然的な熱がたくわえられていて, それが腐敗物の中に分散している動物の諸部分を結合させるからである。(『気象論』 IV. 1, 379b6-8)

この一節を註解するにあたり, アルベルトゥスはまず彼がアヴェロエスに帰属させる立場を吟味する²⁹⁾。彼によると, アヴェロエスは「星々

27) アヴェロエスの『形而上学』大註解については, *Aristotelis opera cum Averrois commentariis* (Venice, 1562-1574; repr. Frankfurt, 1962) の第8巻所収のテキストを用い, 引用では LCM と略した上で該当箇所を記す。邦訳は著者(タカハシ)によるが, 前掲の Genequand による英訳も参照した。

28) Averroes, LCM, f. 143b: "Unde Aristoteles dixit quod homo generatur ex homine et sole. Et factus est ille calor in terra et aqua ex calore solis admixto cum calore aliarum stellarum. Et ideo sol et alie stelle sunt principium vite cuiuslibet vivi in natura. Calor igitur solis et stellarum divisus in aqua et terra generat animalia ex putrefactione nata."

29) Albert, *Meteora*, IV, t. 1, c. 11, 223-224.

の力」(virtus stellarum) が自然発生の原因であると考えたという。確かに、先ほど確認したように、アヴェロエスは生物の自然発生に関して、そこに太陽や他の星々の熱が関与していることを論じた。実際、アルベルトゥスも大枠としてはアヴェロエスの考えに同意する³⁰⁾。だが、単純に「星々の力」というだけでは「自然発生」のメカニズムを説明するには十分ではないとアルベルトゥスは考えた。というのも、もしこの種の発生が天体の力によってのみ生じるなら、それは天体の運動と一致するだろうが、現実には一致しない。さらに、発生する生物の色や形、数などの個体的な特徴も、不変的に円運動を行っている天体の作用だけでは説明ができないからだ。したがって、アルベルトゥスは「アヴェロエスの言ったことは不完全である」(dictum Averrois est imperfectum) と結論付ける³¹⁾。

では、「星々の力」、すなわちアヴェロエス的には太陽や他の星々の熱に加えて、いかなる能動的な原理が作用する必要があるのだろうか。アルベルトゥスによれば、まさに人間の種子の中で働いていた「形成力」に類似した力が要求されるというのである。

というのも、生物の種子に、その種子の本性に従って、種子の泡だった自然の精気の中にある力として、自然熱を用いて作用する形成力があるように、不完全な動物の類の中にある力が腐敗した事物のより精妙な湿の中に存在しているのである [...]。次に、その中にある熱が、精妙な湿から何かを切り離し、次にそれを精気にする。その精気は、皮膚の下で円環の形で存続し波打ち、そして質の中にある形成力の運搬者をもたらす。そこから、動物の形相が引き出されるのだ³²⁾。

30) Albert, *Meteora*, IV, t. 1, c. 11, 224, lns. 24-26: "Verum enim est quod omnis generatio causatur ex stellis, secundum quod feruntur in obliquo circulo communiter."

31) Albert, *Meteora*, IV, t. 1, c. 11, 224, lns. 23-24.

32) Albert, *Meteora*, IV, t. 1, c. 11, 224, lns. 11-21: "Sicut enim in semine animalis est vis formativa animalis secundum naturam illius seminis, quae vis est in spiritu spumosa et naturali seminis et operatur per calidum naturale, ita vis in genere animalis imperfecti remanet in subtiliori humido putrefacti [...]. Deinde calidum, quod est in ipso, dissolvit aliquid de subtiliori humido et facit inde spiritum, qui tympanizat infra pellem constantem in circuitu

彼によれば、完全な生物の生殖において、「種子」の中に「形成力」と呼ばれる力が作用することで、形を欠いた質料から生物の完成態が徐々に作られるように、腐敗した事物の中にも、それに類似した力が働いているというのだ。自然発生について太陽や他の星々の力の関与を論じたアヴェロエスの議論をアルベルトゥスは前提として踏まえている。しかし、それだけでは不十分だったのであり、その不十分な理由とは、アヴェロエスが生物の個体的特徴を差異化する形成力の存在を論じなかったからなのである。

4. 結 論

まず、本稿での議論を振り返り、その後そこからさらに導き出される考察を述べることにする。『気象論』第四巻は、四つの「性質」、なかでも「温＝熱」の能動的作用を中心に議論が展開する極めて〈物質主義〉的作品であった。この著作を註解する中でアルベルトゥスは、基本的にアリストテレスの理論を受け入れた上で、さらに「温＝熱」の能動的性格を強調した。だが、アルベルトゥスは自然の熱だけでは、自然の現象は生起しえないとも考えた。彼によれば、自然の熱が物質的実体を生み出すことができるのは、あくまでそれが星辰の力、特に「形成力」と呼ばれる力を伴う場合に限るのである。

このようなアルベルトゥスの議論が明瞭に示されるのは、腐敗した事物から蛆虫などが生まれる「自然発生」の議論においてであった。「自然発生」という現象は、アリストテレスの自然哲学の理論的欠陥を示すものであると考えられもした。アルベルトゥスは、離存的な形相の自存や超越的な形相付与者が存在しなければならないと説くテミスティオスやアヴィセンナの議論には賛同することはなかった。代わりに、アヴェロエスの議論を参照した上で、天体の熱や人間の種子の中で働いているのと同種の力が質料に内在しながら作用することで生物が発生すると考えたのである。

アルベルトゥスにとって『気象論』第四巻は、単にアリストテレスの

et efficitur vehiculum virtutis formativae, quae est in humido; et ex illa educitur forma animalis.”

註解というだけでなく、彼の物質理論、なかでも自然の事物の生成について、一般的かつ包括的な理論を展開した重要な著作とみなされうる。実際、そこで展開されたアイディアは、これに続く彼の『動物論』や『形而上学』においても再び見出されるだろう。さらに、「実体的形相」や「第一質料」といったスコラ自然哲学を特徴付けるような抽象的な理論は、この『気象論』第四巻の註解では、多くの比重が置かれていなかった。それはそのような概念が不要であるということではなく、具体的な自然現象を説明するには「不十分」であると考えられたからだと思われる。実際の自然現象は、元素そしてそれらを構成する四つの性質との作用・反作用で生起すると考えられたのであり、アルベルトゥスはそのような具体的・物質的な自然の原理を考慮した上で、自然の事物に関する一般的な理論を展開しようとしたのである。